

主管校が回ってきた！

第18回日本歯科医学会総会



● 中 原 泉 ●

今回初めて歯科衛生士さんと歯科技工士さんが参加できることになりました。これは第18回総会の1つの特色であろうと思っています。

程度の気持ちなんです。

司会 歯科衛生士、歯科技工士の参加というのは、講演を聞くというパッシブな参加なんですね。アクティブな参加は今回のところは考えていらっしゃるわけですか。

佐藤 今回は初めての参加ですから、参加するということに意義づけをしております。

■ 総会の組織について

司会 それでは、総会の組織についてご説明いただけますでしょうか。



● 佐 藤 亨 ●

この総会も、各研究者が研究を発表する場ではなくて、今まで研究されてきたことの現在と未来について示唆するような総会にしていきたいということで準備を進めております。

「次の歯科医学会総会の主管校をお願いしたいのですが…」

私の学長就任から1年たった平成4年（1992）5月25日、日本歯科医学会会長の関根 弘ら3氏が来校した。当時、日本歯科医学会総会は、4年毎に伝統校5校の持ち回りで開催されていた。次期の第18回総会の主管は、本学の番だった。平成7年（1995）11月開催予定の3年半前の要請であった。

私は内心、ひどく狼狽して即答を避けた。というのは、30年前の第13回は本学が主管したが、私は、そのときの役員の辛酸を詳さに見ていた（当時は、総会運営費全額を主管校が算段しなければならなかった）。それに、学長職だけでも精一杯なので、私は1週間迷いに迷った。私のときに回ってきた不運を嘆いて、既定の順番を逃げるわけにはいかない。

総会運営のカナメは、準備委員長であった。その役には、歯学部解剖学教授の佐藤 亨しか浮かばない。彼が本学の白菊会を、全国最大の献体団体に育てあげたことを知っていた。一癖二癖もあるが、彼の統率力と実行力はダントツ、とひそかに畏敬していた。その彼が準備委員長を引き受ければ、総会を受諾すると私は丁か半に賭けた。

立ったまま佐藤は、1mも飛び退った（オーバーではない）。彼は両手をふって、私などトンデモナイと繰り返した。…ダメだな、と内心一喜する自

分がいた。3日後の朝、うつむいたまま佐藤は、「お受けします」と応諾した。—— 賽は投げられた。須賀昭一歯学部長、各法人理事の了解を得て、私は6月8日、関根 学会長に受諾の電話を入れた。2週間待たせたので、電話口から安堵が洩れた。

私と佐藤は、準備委員長を補佐する事務局長には、教授嶋井久一で一致した。あとの各部会・委員会の人選は、佐藤に一任した。

それから3週間後、佐藤は読売トップに交渉し、逸早く併催行事の日本デンタルショーの会場に、あの東京ドームを取りつけた。つづいて、総会会場は帝国ホテルに決めた。私たちの独走に学会理事会は浮き足だったが、各部会・委員会は、さざ波のように一斉に流れはじめた。

やはり見栄があるので、参加者は過去最多の2万人を目標とした。事前申込みの蓋をあけたら、2千人足らずだった。泡をくって私は、全国の都道府県校友会長に総会会頭名で、参加協力を求める電報を打った。有りがたいことに、それが引き金になって参加申込みは急増し、最終的に参加登録は2万5千余名に達した。FDIやIADRをはるかに超える世界最大の歯科学会だ。

（写真：日本歯科医師会雑誌の座談会「デンタル・オリンピック'95 — 21世紀の歯科医療」より、左・中原会頭、右・佐藤準備委員長）